

## 明石照久教授への献辞

総合管理学部長 黄 在南

明石照久先生は、2006年4月に本学に着任され、以後10年間にわたり、熊本県立大学総合管理学部の発展に大きく貢献されました。2016年3月31日付けで定年退職されるにあたり、先生のこれまでのご貢献に感謝するため、さらに先生のご退職を記念して記念号を捧げます。

先生の熊本との最初の縁は2001年に遡ります。その年の10月にあった第49回グループダイナミックス学会で報告するために熊本を訪れたときです。学会は熊本大学で開催されましたが、その時の熊本の印象は非常に良かったことを未だに覚えておられました。熊本城を中心になだらかに広がる水や緑や人の住処が見事に調和のとれた穏やかな町の風景に何となく心を打たれたらしいです。その時の先生の心情を今は読み図ることはできませんが、それが偶然ではなかったことには後になって気づきます。

先生は1974年3月に神戸大学法学部を卒業された後、神戸市役所に入庁され総合管理学部との縁がスタートする2006年4月までの32年間で、神戸市の市民のために全力疾走して来られました。ところが公務員一筋の充実した32年間は、先生の人生の後半を左右することになる決定的な出来事によって舵を切ることとなります。1995年1月17日にあった、阪神・淡路大震災であります。

先生はこの天災によって徹底的に破壊された阪神の大地に希望の種を植えるべく、復興の最前線で東奔西走する日々を送ることになりますが、その時の貴重な経験は、かつてから秘められていた先生の学究熱によって、2001年に3月に神戸大学大学院法学研究科博士後期課程を修了する際、博士論文として生まれ変わることとなります（『自治体エスノグラフィー—地方自治体における組織変容と新たな職員像—』信山社、2002年9月）。教育研究者としての新しい船出の準備が整えられたわけです。

減災・防災を含めた地方自治体の公共経営に関する実践的かつ学問的専門家としての先生のご力量は新天地となる教育と研究の場において遺憾なく発揮され、本学に着任されてからの先生のご活躍は輝かしいものでした。

教育においては、長年の実務や阪神・淡路大震災の時の復興の経験を交えた公共経営の生きた知識を用いた先生の授業は多くの学生の人気を博していました。学部では「パブリック・マネジメント」、「行政評価論」、「行政責任論」、「演習」などを、大学院では「行政評価論特殊講義」、「自治行政論特殊講義」、「特別演習」、「行政評価特別研究」などを担当されましたが、公務員志望の多い本学部の学生にとって先生はまさに目指すべきモデルであり、悩みを打ち明けられる親切なメンターでもありました。

また本学部においてはPBL (Project-Based Learning) 型授業の先駆者として、学内外の教育の場においてプロジェクト・マネジメントの様々な手法を積極的に導入されました。特に、先生のゼ

ミではグループワークやワークショップなどによって公共的な課題を解決していく学生主導の体験的学習をいち早く実施して学習方法の改善によって学生の成長が著しく変わっていくことを証明して頂き、これからの学部の教育のあり方について大きな示唆を与えてくださいました。

これらの手法は学生たちを巻き込んだ地域貢献研究にも威力を発揮します。自主的に手を上げた学生と教員、そして地域の方々との協力によって人吉・球磨地域の振興策を考える本学部独自のプロジェクト、「KUMAJECT」では大学と地域をつなぐハブ的な存在として中心的な役割を果たされます。先生は、このプロジェクトを通して私たちに地域に生きる大学としてのあり方を如実に教えてくださいました。

また先生は多くの地域貢献研究や受託研究を遂行されてきましたが、中でも、「熊本縣市町村合併検証事業調査・研究業務」の受託研究では、全体総括者として、共同参加される多くの先生方々を束ねながら事前学習、資料の収集と解説、実地調査など膨大な時間と努力を注ぎ、2015年2月には報告書としてまとめられマスコミでは大きく取り上げられました。先生にとっての社会貢献はまさに地域に密着して地域の活力を創生することをモットーとする大学の理念を具現化するものでした。そのような努力は大きく評価され、熊本県や県内の多くの市町村の様々な政策を審議する審議会の長として活躍されました。

これまでの先生のご経験がとくに生かされているのが研究の分野です。危機管理、政策評価、地域活性化などなど、公共経営の主要課題に係わる著書・論文を通じて持続的に情報発信をされてきました。さらに、行政組織の人材活用に関する分野では、研究代表者として、科学研究費補助金2009年度～2011年度基盤研究(C)「地方自治体における人的資源管理戦略—自治体行政組織における人材活用のあり方に関する研究—」に採択されるなど、研究水準の高さを窺い知ることができます。

学内においては、地域連携支援委員会コーディネーター(平成20～25年)として本大学の地域貢献の最先端に立って指揮をとられて来ました。近年、本大学が参加するCOC事業(地【知】の拠点整備事業)とCOCプラス事業(地【知】の拠点大学による地方創生推進事業)が文部科学省に採択されるなど、地域に生きる大学として名実ともに自他に認められることとなりますが、その地盤を固めていただいた先生のご功績を決して忘れることはありません。また平成26年からは、防災・減災ビジョン推進プロジェクトの責任者として、万が一のときのための地域保全の教育に尽力されました。

研究科長(平成24～25年)としては、2年間という短い任期期間中にとくに大学院生の教育指導体制の強化に全力を注がれました。学部設立20周年を迎えいよいよ定年退職される教員が増えていく中で大学院教育の不備が課題となって間もないですが、いち早く課題の重大性を指摘され、現在進行中にある大学院改革のお膳立てをしていただきました。振り返ると、あっという間の10年間でしたが、時間だけではとても計り知れない先生が残して下さいました多くの教訓を私たちはこれから時間をかけて噛みしめていくことになると思います。最後となりますが、明石先生、長い間、本当にお世話になりました。